

日本記者クラブ賞

三陸被災者ルポの萩尾信也記者（毎日新聞）に 特別賞は 福島第一原発水素爆発の瞬間を撮影した福島中央テレビ報道制作局 と 壁新聞の石巻日日新聞 に

公益社団法人・日本記者クラブ(吉田慎一理事長)は4月19日、理事会を開き、毎日新聞記者(東京本社社会部部长委員)、萩尾信也さんに2012年度の日本記者クラブ賞を贈り、福島中央テレビ報道制作局(福島県郡山市)と石巻日日新聞(宮城県石巻市)に初めての日本記者クラブ賞特別賞を贈ることを決めた。

萩尾さんは東日本大震災の直後から岩手県の被災地に住み込み、被災者の悲しみと揺れる思いを取材し、企画「三陸物語」を毎日新聞にひとりで長期連載した。福島中央テレビは震災による東京電力福島第一原発事故で1号機の水素爆発の瞬間をメディアで唯一、撮影し放送した。石巻日日新聞は震災後、新聞印刷ができなくなったが、手書きの壁新聞を作り被災者にニュースの発信を続けた。いずれも東日本大震災で日本のジャーナリズムを代表する報道として高く評価された。

6月15日に受賞記念講演会を開催

日本記者クラブは受賞記念講演会を下記のように開催します。日本記者クラブ賞を受賞した萩尾信也記者と、同特別賞を受賞した福島中央テレビ報道制作局、石巻日日新聞の報道担当者が、東日本大震災をめぐるそれぞれの取材体験や報道について語り、参加者の質問に答えます。

- 出席者： 萩尾信也・毎日新聞記者（東京本社社会部部长委員）
佐藤 崇・福島中央テレビ報道制作局長
武内宏之・石巻日日新聞常務取締役報道部長
- 日時： 6月15日（金）午後6時～7時30分
- 会場： 日本記者クラブ 10階ホール
- 定員： 200人（申し込み先着順）
- 参加費： 無料

日本記者クラブ会員だけでなく、一般の方も参加できます。ご希望の方は下記の要領でお申し込みください。

<応募方法> 住所、氏名、電話番号、年齢、参加人数(2人まで)を記入のうえ、メールでお申し込みください。折り返し参加の可否をご連絡します。

申し込みアドレスはこちら kinenkoen@jnpc.or.jp

*折り返し参加の可否をご連絡します。

*いただいた個人情報は本講演会以外の目的には使用いたしません。

【贈賞の理由 受賞者・社の紹介】

日本記者クラブ賞

萩尾信也（はぎお・しんや）毎日新聞記者（東京本社社会部部長委員）

萩尾信也記者は東日本大震災の直後から、出身地でもある岩手県の三陸沿岸に住み込み、被災した人々に時間をかけてじっくり話を聞く長期現場取材をひとりで続けた。ひとりひとりのあの日のすさまじい体験。愛する家族を失った悲しみ。揺れ動く心と思い。そして生きる意味を見出す再生への過程。それらを綿密に記録し、方言を生かした印象深い文章で企画「三陸物語」を2011年5月から2012年3月まで201回連載した。

多くの記者が現地取材ルポを発表したが、中でも萩尾記者の仕事は出色であり、日本のメディアの大震災報道を代表する優れた記事である。大震災の年の日本記者クラブ賞に最もふさわしいと高く評価された。



萩尾信也記者 1955年6月長崎県生まれ。56歳。小学校3年から高校2年まで岩手県釜石市に在住。早稲田大学卒。1980年毎日新聞社入社。東京本社社会部、外信部、バンコク支局特派員、サンデー毎日編集次長などを経て、東京本社社会部部長委員。

連載企画「三陸物語」は2011年5月2日から毎日新聞に連載した。9月までの連載を「三陸物語 被災地で生きる人びとの記録」（毎日新聞社）として出版。

これまでの連載企画に「がんを生きる 寄り添いびと」「ともに歩く 目の探訪記」「ともに歩く 手話の探訪記」など。

日本記者クラブ賞特別賞

福島中央テレビ報道制作局

福島中央テレビ報道制作局は、東京電力福島第一原子力発電所事故で、2011年3月12日の1号機水素爆発の瞬間を世界のメディアで唯一、自社の監視カメラでとらえた。爆発の映像は4分後に緊急放送し、約1時間後にはキー局から全国放送された。当時、首相官邸は「白煙があがっている」という情報しかなく、1号機の状況を把握していなかった。爆発映像を見た福島県民は異常に気づいて避難を始め、政府は前例のない非常事態を初めて知った。また、3月14日の3号機水素爆発の映像も唯一、生中継で速報した。

まさに、衝撃の映像であり、原発神話の崩壊と日本の危機を映像で日本と世界にまざまざと示した。福島中央テレビは万が一の事態に備えて監視カメラを維持し、大震災のあと他社のカメラが機能を失う中、ただ一台、生き残るための努力を続けていた。

この映像がなければ、国民も政府も水素爆発を知らないまま危険な時間をいたずらに過ごす事態に陥りかねなかった。人々に事実を速報するというジャーナリズムの使命を果たし、国民の知る権利に応えた報道である。初めての日本記者クラブ賞特別賞にふさわしいと高く評価された。

福島中央テレビ報道制作局

福島中央テレビ（本社・福島県郡山市）は1970年開局。略称はFCT。日本テレビ系列。

<http://www.fct.co.jp/>

【写真】福島第一原発1号機の水素爆発の映像 福島中央テレビ提供



日本記者クラブ賞特別賞 石巻日日新聞（いしのまき ひび しんぶん）

石巻日日新聞は、東日本大震災の停電と津波で社屋が被災し、輪転機が水没して使えなくなった。「ペンと紙さえあれば」と新聞発行をあきらめず、手書きの壁新聞づくりを決断。記者が浸水した被災地を歩き取材した原稿を、油性ペンで新聞用ロール紙に書き込んだ。壁新聞は6枚作り、避難所6カ所に張り出した。3月12日から17日まで壁新聞の発行を続け、避難者に貴重な情報を提供した。

国内だけでなく世界にも大きな反響をよび、米ワシントンの報道博物館、ニュージウムは壁新聞の現物を展示し、国際新聞編集者協会は特別賞を贈った。日本のジャーナリズムが持つ気概と底力を地元の読者だけでなく、広く日本全国と世界に示した。

どんな苦境に追い詰められても、ニュースを発信し続けた記者魂は全国のジャーナリストにとって励みであり、誇りである。極限状況にもかかわらず、いや、むしろ極限状況だったからこそ、読者と深くつながるといふ新聞の原点に立ち返った。日本の報道史に残る壁新聞づくりであり、初めての日本記者クラブ賞特別賞にふさわしいと高く評価された。



石巻日日新聞

1912年創刊の夕刊紙。今年100周年を迎える。宮城県の石巻市、東松島市、女川町をエリアに発行。震災前の発行部数は1万4000部。

<http://www.hibishinbun.com/>

【写真】手作りの壁新聞と石巻日日新聞の記者
石巻日日新聞提供

* * * * *

【日本記者クラブ賞と日本記者クラブ賞特別賞について】

日本記者クラブ賞は、千葉雄次郎氏（元日本新聞学会会長）が同クラブに贈った寄託金を基金として1972年、創設された。その後も、クラブへの寄付金を基金に積み増し、賞を運営している。報道・評論活動などを通じて顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた日本記者クラブ会員および法人会員社に属するジャーナリスト個人に贈る。今回の萩尾氏を含め、受賞者は計46人になる。

日本記者クラブ賞特別賞は、クラブ賞創設40年を機に、より開かれた賞をめざして新設された。原則としてクラブ会員以外の内外のジャーナリストやジャーナリズム活動に贈る。ジャーナリズムの向上と発展につながる特筆すべき業績や活動を毎年顕彰する。今回の福島中央テレビ報道制作局と石巻日日新聞が初めての特別賞となる。

いずれも日本のジャーナリズムの高い水準を示す表彰であり、日本記者クラブの公益目的事業のひとつである。

日本記者クラブ賞歴代受賞者一覧 <http://www.jnpc.or.jp/activities/award/awards-prize/>